

ワークライフバランスと公共性—個人志向性と社会志向性からみた意識の分析—

東北工業大学大学院 学生会員 ○荻野 涼平
東北工業大学 正会員 泊 尚志

1. 背景と目的

我が国では、市民の社会参加が重要である。そのため人々の地域とのつながりや、他者との関わり、協力意識の重要性が認識されている。その一方で、近年働き方改革が順次施行されるなどワークライフバランス（以下 WLB）の重要性の認識が急速に広がりを見せており、個人の余暇時間の重要性が広く共有されつつある。このことは社会として望ましい側面である一方で、「個人」の時間が強調されるあまり市民が社会と関わる機会が減少し、それが社会に向けられる意識の低減につながり得る。

以上を踏まえて、本研究では利己性や他者への依存と関係する個人志向性、社会志向性の2つの尺度と、傲慢性と自己閉鎖性の2因子を有する大衆性の尺度を用いて、人々の公共性の意識を測定し、WLBにおける人々の余暇に対する意識と公共性の意識の関係の分析をすることを目的とする。

2. 既往研究の整理と本研究の方針

余暇に対する意識を測定するにあたって本研究では「レジャー志向性尺度」¹⁾に着目する。レジャー志向性とは余暇に対する考え方や好み、行動傾向を測る尺度であり、特徴としては、「対人関係志向」や「長期展望・向上」、「主導性」、「活動性」、「利他主義」の側面から把握できることが明らかとなっている。¹⁾²⁾

次に、個人志向性とは「自分独自の基準を尊重し、個性を活かした生き方への志向性」、社会志向性とは「他者、あるいは社会の規範に則った生き方への志向性」を表す³⁾。また、2つの志向性にはそれぞれP尺度とN尺度があり、個人志向性P尺度は自己実現の欲求、N尺度は利己主義をそれぞれ表している。社会志向性P尺度は他者、社会規範への志向、N尺度は他者への一方的な依存を表している。⁴⁾

次に、大衆性とはスペインの哲学者オルテガが「大衆の反逆」で論じている「大衆人」の持つ心理尺

度のことを表し、傲慢性と自己閉鎖性の2因子から構成されることが明らかにされている⁵⁾。傲慢性とは、「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」のことを表し、自己閉鎖性とは「自分自身の外部環境からの閉鎖性」のことを表している。

以上を踏まえて、本研究では、まずレジャー志向性を定量的にとらえて、公共性の意識との関係性を明らかにする。

3. 調査概要

本研究では全国の20歳～65歳の従業者を対象に意識調査を実施した。調査方法はwebアンケートにて行った。調査日は2023年1月20日から22日の3日間で、最終的な有効回答数は466件（人）であった。

4. 分析

レジャー志向性の因子分析の結果、本研究では他者との活動を志向する「対人関係志向」、長期的な視点を持ち、自身の将来につながるような行動を選択する傾向の「長期展望・向上」、自ら進んで物事を計画する傾向の「主導性」、自分自身より他者への貢献を志向する「利他性」、休養よりは身体を動かす、また外出志向の「活動性」、時間があれば学習を選択する傾向の「学習・自己啓発」、の6側面から把握することができた。以上を踏まえて次の仮説を構築した：

- 個人志向性P尺度に対して「長期展望・向上」「主導性」「学習・自己啓発」が正の影響を与える。
- 個人志向性N尺度に対して「利他主義」が負の影響を与える。
- 社会志向性P尺度に対して「対人関係志向」「利他主義」が影響を与える。
- 社会志向性N尺度に対し「主導性」が正の影響を与える。

キーワード：ワークライフバランス 余暇活動 個人志向性 社会志向性 大衆性

連絡先：〒982-8577 宮城県仙台市太白区八木山香澄町35番1号、電話022-305-3533

- ・ 傲慢性に対し「長期展望・向上」「利他主義」が負の影響を与える。
- ・ 自己閉鎖性に対し「対人関係志向」「利他主義」「活動性」が負の影響を与える。

以上の仮説を検証するために共分散構造分析を行った。分析結果を図に示す。

5. 考察

紙面の都合上、ここでは影響関係の大きいものについて考察する。はじめに、個人志向性 P 尺度に対して「主導性」が正の影響を与えることが確認された。これらは、物事の計画を自ら進んで立てるという傾向が、自身で物事を決める能力の醸成や、自身の強みを活かす経験へとつながり、それらが自己実現への欲求にも影響されると考えられる。

次に、社会志向性 P 尺度に対して「対人関係志向」が正の影響を与え、「利他主義」が負の影響を与えることが確認された。これらは、「対人関係志向」が高い人ほど、人と関わる機会が多く、人との関わりの中で、自然と他者、社会への規範が醸成されると考えられる。「利他主義」との関係については、まず今回抽出された「利他主義」が自己満足の側面があることが影響していると考えられる。その結果、他者や社会への規範というよりも、むしろやってあげてというような意識が醸成され、低減効果が生まれたのではないかと解釈した。

次に、傲慢性に対して「利他主義」が正の影響を与えることが確認された。これは、まず前述でも述べたように「利他主義」に自己満足の側面があると考えられること、また既往研究でも、ボランティア活動を通すことによりむしろ傲慢性が上がるという結果が出ていることもあり、自己満足という側面から自身に対する有能感が醸成され、より一層傲慢性を高めてしまっているのではないかと考えられる。

最後に、自己閉鎖性に対して「利他性」が負の影響を与えることが確認された。これは「利他性」が他者への関心にあり、自己閉鎖性が自己以外への無関心を表すことであるから、「利他性」が負の影響を与えるということは十分に解釈可能である。

6. 結論

本研究では、従業者を対象に余暇に対する意識と公共性の意識の関係の分析をした。結果として、

- ・ 個人志向性 P 尺度に対し「主導性」が正の影響を

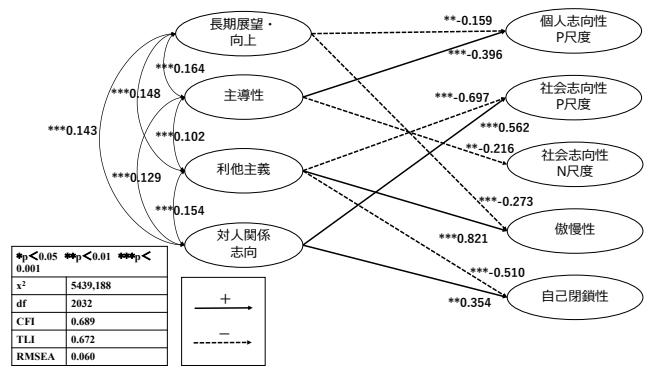


図 共分散構造分析の結果

を与え、「長期展望・向上」が負の影響を与える。

- ・ 社会志向性 P 尺度に対し「対人関係志向」が正の影響を与え「利他主義」が負の影響を与える。
- ・ 社会志向性 N 尺度に対し「主導性」が負の影響を与える。
- ・ 傲慢性に対し「利他主義」が正の影響を与え、「長期展望・向上」が負の影響を与える。「
- ・ 自己閉鎖性」に対して「対人関係志向」が正の影響を与え、「利他性」が負の影響を与える。

ということが明らかとなった。なお本研究では、WLBの観点からの分析ができていない。そのため、追加の分析を行い、考察を深める予定である。

参考文献

- 1) 佐橋由美・佐藤馨：レジャー志向性尺度の開発に関する研究(2)―多様な大学生における調査データから志向性尺度の今後を展望する―，レジャー・レクリエーション研究 59:52-55, 2007.
- 2) 佐橋由美：“最適な”レジャースタイルを特徴づける中核要素としての志向性概念の検討，大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要第8号:25-37, 2009.
- 3) 伊藤美奈子：個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討，心理学研究, Vol. 64, pp. 115-122, 1993.
- 4) 伊藤美奈子：個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討，臨床心理学研究, vol. 13, pp. 39-47, 199

羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡：大衆性尺度の構成―“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析―，心理学研究, 第79巻, 5号, pp.423-431, 2008.